

第四章 危険！

「私は正しかった、ワトスン」と、大きな肘掛け椅子に座りながらホームズは言った。

「私たちが見た下宿人はウォーレン夫人が知っている男ではない。美しく若い女性なのだ！」

「そうだね」と私は言った。

「そして彼女は私たちのことを見たね」

「そうだな、彼女は自分を脅かすものを見た」とホームズは言った。

「今、全てがもう少し明確になった、そうだろう？ ある男と女が危険な状況から逃れるためにロンドンへやって来る。その男には何かしなければならない仕事があって、女を安全な場所に残していく。これは容易ではなかったが、彼には巧みな計画があり、女をうまいこと隠した。ウォーレン夫人でさえ、その下宿人が誰なのか分からなかった！ 女の筆跡であることから、女は大文字で書く。彼女は自分のことを誰にも知られたくなかったのだ。敵がその女を見つけてしまうかも知れないので、その男は彼女に近づくことができない。だから彼は新聞にメッセージを書く。ここまでは、全てははっきりしている」

「しかし、この背後には何があるのだろうか？」と私は尋ねた。

「ああ、そうだな、ワトスン」とホームズは言った。

「この背後に何があるのか？ ウォーレン夫人の問題は私が思ったよりも大きいぞ。私たちはあの若い女性のおびえた顔を見たし、ウォーレンさんに何が起きたかを聞いた。これは生死に関わる問題なのだよ、ワトスン。だが、その敵は下宿人が変わっていることについては知らない。まったく非常に奇妙なことだ」

私たちがウォーレン夫人の家へ戻ったのはある寒い冬の晩だった。

私たちは暗い居間で、大きな窓の前に腰掛けることに決めた。

そこから私たちは、赤い建物の3階の明かりを見ることができた。

「あの部屋に誰がいるな」と、ホームズは窓のそばへ移動しながら言った。

「暗い人影が見えるぞ。また彼が出てきた！ 彼は手にろうそくを持って、窓の外を眺めている。今、彼はろうそくの炎でメッセージを送り始めるところだ。二人でそのメッセージを読んでみよう、ワトスン。光一つ『A』だな。今、彼はいくつの光を作ったのだ？ 20だ。合っているか、ワトスン？」

「ああ、彼は20光らせたね」と私は言った。

「つまりTってことだ。A、T…。At—これは確かだ。今またもう一つTだぞ。新しい単語の始まりだな。うーむ…TENTAか。止めたぞ。これがメッセージであるはずがないな。AT、TENTAじゃ何も意味しない。きっと3つの単語なのだろう—AT、TEN、TA、いやひよっとしたらTAは人の名前の一部かもしれない。また始まったぞ！ 何だって？ ATTE—また同じメッセージだ。何ておかしいことなんだ、ワトスン。今彼は3度目のメッセージを送っている—ATTENTA。彼は窓を離れたぞ。メッセージは終わったのだと思う。君はどう思うかい、ワトスン？」

「分からないよ、ホームズ」と私は言った。

すると突然ホームズは笑って、「当然だよ、メッセージはイタリア語なのだ！ 単語の終わりのAは、そのメッセージは女性に向けたものだということだ。『気を付けろ！ 気を付けろ！ 気を

付けろ!』という意味だ。どうだい、ワトスン？」

「その通りだと思うよ、ホームズ」と私は言った。

「間違いない!」とホームズは言った。

「だが、何に気を付けるのだ? 待てよ! 彼がまた窓にいるぞ」

私たちは再びメッセージを送り始めた男の暗い姿を見た。

今回、彼はとても素早くメッセージを送り、それについていくのは困難だった。

「PERICOLO! これは何だっけ、ワトスン?」とホームズは言った。

「イタリア語で危険じゃなかったか? ああ、もちろんだとも、これは危険信号なのだ。ほら、また始めるぞ! PERI...。何が起こったのだ?」

明かりは消え、その建物の3階は暗くなった。

メッセージは突然終わった。

何が起きたのだろうか?

ホームズと私は同様の考えを持った。

ホームズは椅子から飛び上がった。

「ワトスン、これは深刻だ」と彼は叫んだ。

「何かひどいことが起こっているのだ。なぜメッセージは途切れたのだろうか? スコットランドヤードを呼びたいところだが、私たちは今離れることはできない」

「どうしようか?」と私は尋ねた。

「私たちにはもっと事実が必要だ」とホームズは言った。

「さあ、ワトスン、何が起きているか調べに行こう」

ホームズと私は急ぎ足で歩いて家を出て、通りを渡った。

私はウォーレン夫人の家を振り返って眺めた。

最上階には、窓際に女性の頭が見えた。

彼女はメッセージが続くのを待っていた。

赤い建物のドアに、黒っぽいコートを着た男が立っていた。

彼は私たちを見ると、「ホームズさん! ワトスンさん!」と呼んだ。

「グレグスンさん!」と、ホームズはスコットランドヤードの刑事を見て言った。

「なぜここにいるんです?」

「あなたがここにいるのと同じ理由で、私はここにいるんですよ」とグレグスンは言った。

「あなたはどうやってこのことを見つけ出したのですか?」

「あなたとは違う方法でね」とホームズは言った。

「私は信号を見ていたのですよ」

「何の信号ですか?」とグレグスンは尋ねた。

「窓からの信号です」とホームズは言った。

「それが突然途切れて、それでワトスンと私はなぜなのか調べるためにここへやって来たのです。しかし、事件はあなたの手中にあるのだから、私たちは行ってもいいようすな」

「ちょっと待ってください!」とグレグスンは叫んだ。

「私はあなたが私と一緒にいる方がいつも心強いんですよ。このアパートの出口は一つしかあり

ません—正面のドアです。だからわれわれはあいつを捕まえますよ！」

「あいつとは誰のことですか？」とホームズは尋ねた。

「知らないんですか？」とグレグスンは驚いて尋ねた。

「まあ、一度くらいは私があなたより多く知っているってことすな、ホームズさん」